

—平成17年度気象講演会開催報告—

気象講演会雑感

講演会担当幹事 網藏 真
(財団法人 日本気象協会北海道支社)

平成17年度の気象講演会は、「宗谷地方の強風」というテーマで、稚内地方気象台の防災気象講演会との共催で開催した。内容は、宗谷地方特有の暴風や暴風雪の状況と災害軽減への取り組み、宗谷海峡付近の海流の知られざる姿、環境及びエネルギー問題対策としての斬新な風力利用法と多岐に渡った切り口の講演であった。

瀧田様の講演では、宗谷地方の過去から現在にかけての暴風雪災害の状況と、天気予報精度向上のためのスーパーコンピューター利用が説明された。しかし、一方では、このスペコンのような機械には真似の出来ない点として、気象台と地域との人的交流を地域防災の要にしていること、そして、24時間天気を絶え間なく監視する気象台の姿が印象的であった。

遊馬様の講演では、稚内の強風の特徴と北海道に猛烈な暴風をもたらした平成16年台風第18号発達の原因が説明された。その真相とは、熱帯の海で生まれて湿った台風第18号が高緯度で生まれた上空の乾燥した低気圧と合体による潜熱の解放であった。出会う前を辿ると1週間以上前まで遡れるそうであるが、講師曰く必然の出会いと言うよりは人間臭く偶然かもには共感した。

江淵様の講演では、宗谷暖流とは北海道西海上を北上して宗谷海峡を抜けてオホーツク沿岸に沿って流れるという単純なものではないことが説明された。海流測定のために宗谷海峡付近でブイを離してその位置を衛星で追跡した図は海流の真の姿が垣間見られて興味深かった。ところで、海流とテーマの強風がどうして関係するかというと、海流は「海の風」と比喩され風が吹く仕組みと同じようである。

内山様の講演では、エネルギーと環境など多くの問題を抱える現在は、待った無しの状況であり、技術面から風力による水素製造がもっとも相応しいと壮大で実現性のある話が紹介された。海上に風力発電を利用した水素製造プラントを浮かべ、さらには石油合成まで行うという構想に基づき、具体的な構造設計や模型によるプールでの基礎実験の実施状況が説明された。ぜひ実証プラントを見たいと期待感を抱かせる話であったが、浮遊するプラント運営には台風予想精度がキーになるとのこと。

日時：平成17年10月8日（金）13時30分～17時00分

場所：稚内総合文化センター

出席者：82人

講演：テーマ「宗谷地方の強風」

(1) 「宗谷地方の暴風雪について」

瀧田 芳信（稚内地方気象台技術課課長）

(2) 「暴風をもたらす低気圧や台風」

遊馬 芳雄（北海道大学大学院理学研究科講師）

(3) 「宗谷海峡の流れを測る」

江淵 直人（北海道大学低温科学研究所教授）

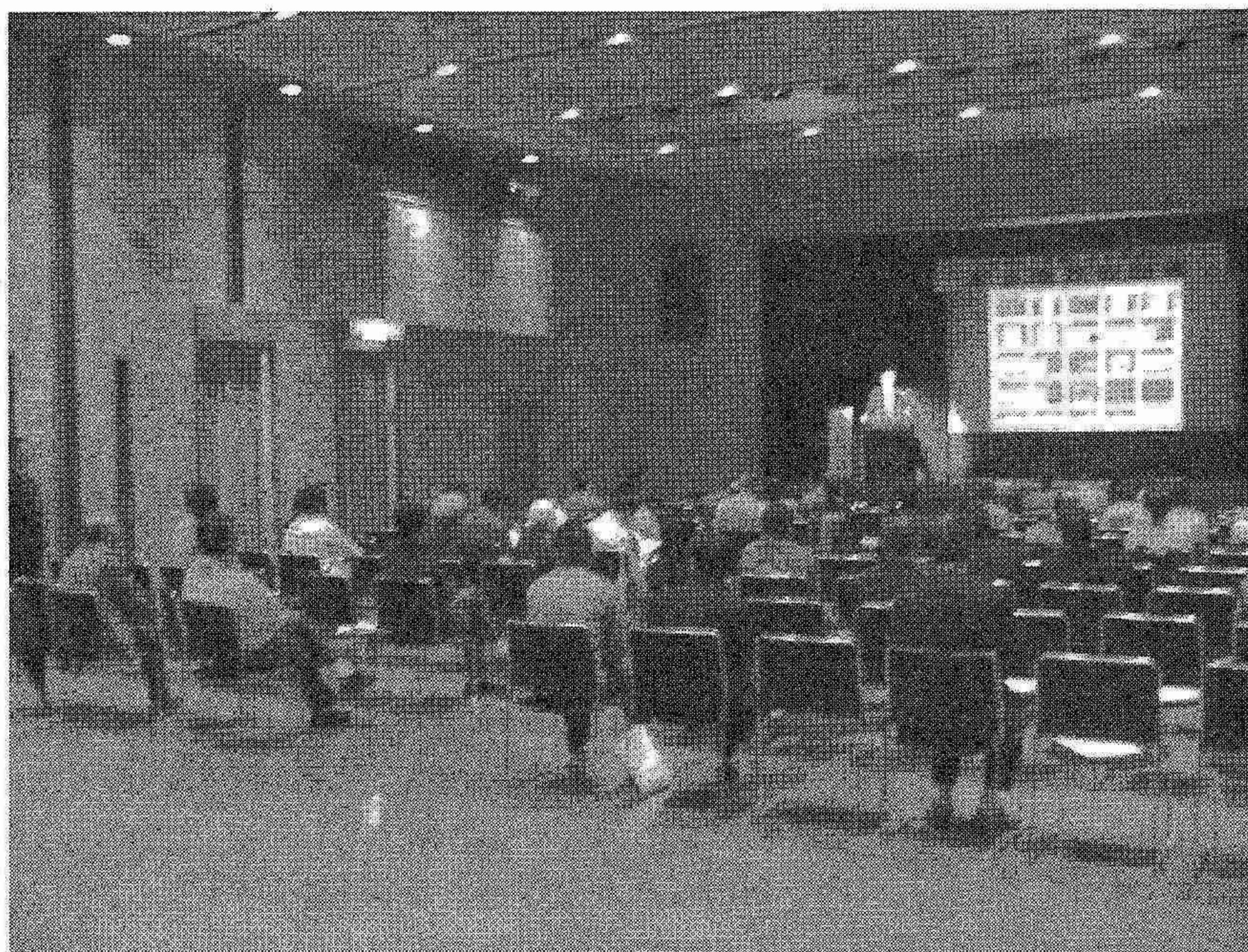
(4) 「風力を利用した水素製造」

内山 政弘（国立環境研究所 主任研究員）

共催：稚内地方気象台

後援：稚内市、稚内市教育委員会、稚内開発建設部、北海道宗谷支庁、NHK旭川放送局、
北海道新聞社稚内支局

当日は小雨模様の天気で、多くの人に集まっていただけか心配であったが、出席者数は最終的に82名に達して予想以上の多くの方に集まって頂いた。出席頂いた皆様、講師の方々、関係各位、特に稚内地方気象台のご尽力に深く感謝する次第である。



気象講演会々場の様子